

蒲生干潟で見られる野鳥とそれらを支える生態系11



図1 ハクセキレイ



図2 ウミネコ



図3 ササゴイ



図4 ダイサギ

今年巣立ったと思われる幼鳥。羽毛の色が成鳥とは違う。



図6 オオヨシキリ



図7 ホオアカ

ヨシ原の中(図6)や草木のてっぺん(図7)、上空(図8)などそれぞれの場所で繁殖活動、縄張り維持のためにさえずっている。



図8 ヒバリ



図9 ミサゴ

魚を捕えて運ぶミサゴ。餌を捕えた後はいつも同じく干潟の北西方向へ飛んでいく。



図5 カワウ

潟湖内で群れて泳ぐボラなどの魚類を主に狙っている。図3,4はカニなども食べる。



図10 コメツキガニ



図11

コメツキガニなどが掘ったと思われる巣穴と砂団子。



図12 トビイロシワアリ

これから飛び立つ女王アリと見られる。蒲生干潟には様々な種類のアリが生息している。地中に巣をつくるカニ類やアリなどは重要な生態系エンジニアである。

調査日 2026年6月25日(木) 13:00~14:30

ヨシ原のいたる所でオオヨシキリとともにセッカの鳴き声が聞こえていた。図1, 2はいずれも幼鳥でこの春に生まれ、巣立った個体だと思われる。どちらも成鳥と変わらない大きさまで成長しているが、成長と同じ羽毛に生え変わるにはハクセキレイで1年、ウミネコでは3年ほどかかると言われている。ササゴイ(図3)やダイサギ(図4)、カワウ(図5)が潟湖の中で採餌行動をする姿が見られた。図6~8はどれも口を大きく開けてさえずっている姿である。これらの種にとって5~6月は繁殖期のピークと呼べる時期である。それぞれの種が好む環境で縄張り主張や繁殖相手の確保や維持のために盛んにさえずっている。図9は魚を捕えて運ぶミサゴである。いつも同じく干潟の北西へ飛んでいく様子が見られ、その先に巣があり給餌を行っているのか、自らが落ちていて餌を食べられる拠点があるのではないかとと思われる。コメツキガニ(図10)やチゴガニ、アシハラガニなど多くのカニ類が見られた。図11はカニの掘った巣穴と、砂に混ざる有機物を漉しとって食べた後に排出したものである。また、砂丘地帯の流木の下には多くの種類のアリ(図12)が見られる。カニやアリはどちらも土壌を掘って生活するため地中に水や空気を通り道ができ、有機物を循環させ、他の生きものにとっての棲み処にもなっている。このように豊かな環境をつくりだす土台となるこれらの生きものは生態系エンジニアと呼ばれる。(伊藤勝彦)